

「けんしゃ」？「けんじゃ」？

「著作権者」の読みは「しゃ」か「じゃ」か、という問い合わせを受けた。アクセント辞典にはないが、国語辞典類では「ちょさくけんしゃ」となっている。ただ『図書館用語大辞典』では「ちょさくけんじゃ」としている。そこで「者」のつく熟語を逆引き辞典で調べてみると、いくつかの規則性が見えてきた。

『日本語逆引き辞典(大修館書店1990)』では「者」のつく熟語は110語あまりだが、「じゃ」と読むのは29語。ほとんどが漢字2文字で、そのうち19語は「者」が撥音「ン」に続いている。「隠者、演者、縁者、患者、賢者、権者、信者、撰者」などである。「ン」のあとの「しゃ」は「三者、仁者」だけで、「ン」の後は濁音という規則性が強いことがわかる。

そこで、漢字3文字以上の語で「者」が「ン」に続く語を調べてみると、「異端者、偽善者、禁治産者、経験者、債権者、主権者、初心者」など、こちらはほとんどが「しゃ」で、「じゃ」は「修験者」だけだ。3文字以上になると「ン」のあとでも濁音にならないのはなぜだろう。

複合語の後部要素が濁音化する現象を連濁と呼ぶが、前後の要素の結びつきが強いほど連濁しやすいという傾向がある。上記の漢字3文字以上の語は、ほとんどが[[A+B]+者]という構造だが、ここで「者」が連濁すると[B+者]の結びつきが強く感じられ、誤って[A+[B+者]]と受け止められやすい。このため「ン」の連濁を避けるとい

うメカニズムが考えられる。「修験者」の場合「修験」のなかにすでに連濁があるため「者」が連濁しても影響が少ないのだろう。

「著作権者」は「著作権+者」だから連濁しにくいはずだ。それでも「じゃ」と発音する場所があるのはなぜか。そこで「権者(けんじゃ)」という読みがなつきの例をインターネットで検索してみた。すると、著作権者のほかに、告訴権者、任命権者、免許権者、請求権者、決裁権者、利用権者、賃借権者、担保権者などを「けんじゃ」と読んでいる例が、主に行政・法律関係のページで見つかった。

ここから考えると、行政や法律の専門家の中で「権利者」という意味の「権者」という新しい語が生まれていて、その関連語の意識で「〇〇+権者」という語を使っているように見える。また、専門家は自分たちの専門分野のことばを一般とは違う読み方やアクセントで話す傾向があることが指摘されている。外来語のアクセントの平板化もこれが原因と考えられているが、「〇〇けんじゃ」という例外的な連濁も、こうしたいわば仲間うちことばの一種と見ることもできる。

いずれにせよ、「〇〇権者」を「けんじゃ」と読むと、専門家からは「この人はよく知っているぞ」と思ってもらえそう。ただ外来語の平板化アクセントと同様、放送では避けておくのが賢者の知恵というものかもしれない。

杉原 満(すぎはらみつる)